

1 学校配置の考え方に関する意見

- ・地域における高校の存在意義は非常に大きいため、第3期県立高校将来構想の学校配置の考え方が一番の基本になると思う。すべての子供たちの教育の機会均等であるとか、あるいは地域的なまとまりの中で、子供たちが通えるその選択肢をしっかりと確保していくことは非常に重要なことであって、今後土台としては揺るぎないものと思っている。
- ・今後生徒数が減少することを考えると、すべての地区で生徒の希望に沿った教育機会均等を確保することは現実的には非常に難しいと感じている。少人数でギリギリまで存続が可能であれば、もちろん維持すべきだと思うが、その後、どうしても維持が難しくなった場合に、統廃合という形になると思う。その再編基準を今から決めることは非常に重要だと思う。廃校とした場合、ICTを活用した遠隔授業をするとか、学生寮を整理するというように、様々な選択肢を準備する必要があると思う。
- ・ある程度距離が離れた場所からでも通えるようにするため、スクールバスを運行することは私自身も一つの方策と考えている。アメリカでは、自宅から学校まで行ける範囲でない場合、スクールバスが各家庭の子供達を乗せて、小中高がある中心部の町まで連れて行っている。広大な土地で子供達がバラバラにいることを考えると、そのようなことをやらざるを得ないのだと思う。
- ・小中高と別々の校舎ではなくて、1つの大きな校舎に小中高生が一緒にいるような学校も考えられる。そこには確実に子供達がおおり、様々な学校行事などを一緒にできて、地域にも学校が残せるので、そのようなことも1つの手と考えており、それが地域活性化にも繋がれば良いと感じた。
- ・専門学科が中部地区に集中しているのではないかと思う。以前からも意見していたとおり、英語科やスポーツ学科など、そういったものを各地区に設けることも必要だと思う。ただ作って終わりではなくて、若狭高校のように生徒の海外留学に取り組むなど、特色ある学科を作っていくことも重要ではないかと思っている。
- ・普通科、専門学科の2つに分けるというだけではなくて、幅広い選択肢から選択ができるという観点から、様々な学科の在り方についても工夫ができるのではないかと思っている。例えば、工業高校の学科の考え方について、今、情報通信がこれほど発展していく中で、どのように学科改編をしていけば良いのか、今、社会が大きく動いているので普通科と専門学科を合わせた形など工夫の考え方があるのではないかと感じている。
- ・専門学科だけにするのではなくて、普通科と様々な専門学科を一緒に置いた方が、行きたいのに行けないということが無くなり、交通費の面でも保護者としては助かるため、その点を踏まえてもらえたらありがたい。
- ・地元の子供達が地元の高校に進学するデータについてはあくまでも結果であって、生徒やその保護者が本当の意向を考えないと、本当の意味での教育の機会均等にはならないと思っている。統廃合を検討する際、お金をかけてどこかに行かなくてはならない人達に対して、奨学金制度やスクールバス制度、定期券割引の拡充など、思い切ったことをしないと、可能な人にしか門を叩けないのは本当の機会均等ではないのではないかと感じている。

2 普通科の在り方に関する意見

<普通科改革に関する意見>

・学際領域や地域社会などの普通科改革は、高校だけの力だけではなくて、外部との連携が重要だと考えている。学際領域であれば、大学との連携は欠かせないし、地域社会であれば地域の産業と繋がらなければできない部分が多い。魅力ある普通科にしていくためには、学校任せではなくて、地域等との連携が必要になってくると感じている。

・普通科改革について、学際領域と地域探究はあくまで国の例示なので、宮城県の土地柄に応じて普通科改革するとしたら、どういう学科が相応しいのかといった議論がむしろ必要になってくると思われる。

<地域進学重点校に関する意見>

・地域進学重点校に入学する生徒は4年制大学への進学を望んでいる生徒だけではないような気もする。地域を担ってくれる人材育成についても地域進学重点校に求められている姿ではないかという気もしている。方向性（案）のところにあった普通科改革や他県の普通科改革の取組を見ると非常に魅力を感じた。

・地域進学重点校において、進学率が伸び悩んでいることについて、学校の取組状況を見ると、進学希望者が少ないからなのか、成績の問題なのかは不明瞭だと思う。まずは、その辺を明らかにし、進学重点校ではなくて、教育重点校として、進学も専門と合わせてもう少し大きな規模にして、切磋琢磨できるようなものにすれば、教員配置の問題もすっきりするのではないか。

<その他魅力化等に関する意見>

・宮城県は国際卓越研究大学に認定予定の東北大学と県立の宮城大学があるため、大学生や大学院生をリソースとして使わない手は無く、それが眠れる資源なのではないかと考えている。例えば県立の高大一貫コースなど、7年間かけて宮城の産業や地域課題を解決していく真のリーダーを育てていくというようなコースの設立も、普通科の特色づくりとしてあるのではないかと考えている。

・登米市では不登校の生徒の数も最近非常に増えてきており、その生徒達の進路先は通信制高校が多い。それは通信制高校に行きたいとか定時制高校に行きたいという積極的な選択ではなく、限られた中で自分はどこに行けるかなという選択なのではないかと考えている。その時に近隣にある少人数の普通科、40人いない普通高校の普通科が選択肢にあれば魅力とを感じる生徒がいることも確かである。

・地域では、お子さんを残してもらいたいとか、活性化という問題があると思う。カウンセラーである私としては、子供がどうしたいか、どういう可能性があるのかということを知ることは、最初にあるべきと思う。だとすれば、地域にこそもう少し頑張ってもらって、例えばUターン制度を導入するとか、単体にボランティアを組み込んで、中部地区から地域の方に行って、ボランティアで地域を発見させるとか、そういった仕組みで活性化をするというような方向性も考えられるのではないかと考えている。

3 専門学科に関する意見

- ・大河原産業高校は県内で唯一、森林や林業が学べる教育課程があり、演習林もあるため、県内の農業高校で森林に興味がある生徒達を例えば夏休み期間中に受け入れる。あるいは本校では柴田農林高校にあった畜産部門を人数の関係で廃止しているため、畜産などを学びたい本校の生徒は、施設・設備が充実している宮城農業高校や加美農業高校などに夏休み期間中に短期間の研修に行くといった取組を県内の農業高校で連携してできないか。
- ・学校間の乗り入れでサマースクールなども単位認定できるのであれば、拠点校は地域にこれまで複数あった専門学科が集約されているので、その部分を活かして、いろいろな学びを学校間の乗り入れで実現していくこともあり得るのではないか。
- ・農業、水産、林業、工業それぞれが、今、技術・環境が大きく変わっていて、例えばスマート農業みたいなものが非常に多くなっているが、農業だけではなく、工業やICTと連携した農業や漁業が進んでいった時に、それを教えられる先生がどの程度いるのか、そのような先生をどれだけ配置できるのか準備が非常に重要になってくると思う。
- ・最先端技術を取り入れた農業、水産業、林業などを教えてもらえる学校ができると、県内だけではなく、県外からも生徒が来るのではないかと思う。宮城県は自然に恵まれていて、実地研修ができるので、それを生かして、日本一の専門学科を作ることも狙っても良いのではないか。
- ・地域産業を支えるというのは、どうも産業界目線となっていて、生徒が主語になっていない。儲かる農業でも良いし、農業を学んでワクワクして、それは収入にも繋がるというような生徒を主語にした在り方でも良いと思う。出口としてもこういう就職先があるのかと言ったように、産業政策と教育政策が連携していくべきものを念頭に置いた専門学科の在り方、配置というのを考える必要があると思われる。
- ・専門学科が進学先に選ばれないのは、一次産業に対する価値観があまりにも古いためと思われる。農業高校や水産高校は、科学やテクノロジーが浸透してきていて、社会に開かれた教育課程の最たるもので、同時に自然を相手にするし、商売もする。希望して入学する生徒は少なく、学び直しや学校生活に適應できなかった生徒が行く傾向があるが、そこで自信を取り戻したり、自己肯定感を感じたり、将来希望を持って就職や進学をしている実態からすると、これまで成果を出してきていると思う。
- ・少子化の影響で、統廃合は避けられないと思うが、十分な人的物的資源を確保しなければならないと思う。専門高校は、演習林があったり、牛が居たり、農地があるので、専門の教員が成り立たないため、それを維持したり、スマート化するためにお金を出せるのかが、夢とか希望に繋がると思う。

4 多様な生徒のニーズへの対応に関する意見

<定時制・通信制課程に関する意見>

・定時制・通信制課程について、色々な課題や困難を抱えて、正しい学習を継続、あるいは充実させたいという生徒が入ってくる一方で、そうではない層も相当に多いというのが現実。例えば、通信制は自ら学びの意思が担保されていないと学習の継続そのものがままならないが、全日制、あるいは定時制を続けられない、ドロップアウトのように客観的に見えるような生徒が通信制に入ってきて溜まっていつてしまう。実質的には科目の履修登録はするが、学習はしないという子が非常に多い。一方で何かやりたいことがあって、通信制、私学の広域の通信制も含めて選択している子は非常に学びが前向きと思われる。そういったことを意識して考えていかないといけないものと感じている。

・最近の国の政策の動向では、全定通の相互乗り入れ、複数の課程を置く高校というトレンドもあるので、課程を跨いだ高校の在り方というものも今後検討する必要が出てくるとと思われる。

<アイデアルスクールに関する意見>

・アイデアルスクールについては、少子化が進む中で、どのような地域に住んでいても、十分な、あるいは等しい教育機会を得られるチャンスを広げる、突破口になる可能性があるのではないかと、そういう印象を与えるものを感じている。

・総論2の方向で進めた場合、学校に登校していない生徒達はどこへ行けば良いのか。町内の学校に登校していない生徒は通信制に通っている現状があるが、学校規模が小さくなっていけばいくほど、さらに選択肢が限られ、そういった子供達がどこに行けばよいのかという感じがした。

<特別支援教育に関する意見>

・特別支援教育は、インクルーシブ教育、あるいはインクルーシブな社会的なシステムの中に組み込まなくてはならないということに国としてもなっているため、合致しない部分があるかもしれないが、考え方としてぜひ取り入れていただきたい。

・高校再編を検討する上で、同じ県立学校の中に、なぜ特別支援学校、あるいはそのような要素を持った子供達の領域というか、場を設定していただけないのかという議論が残念ながらなされていない。台湾では、特別支援学校に附属していわゆる普通の高校があり、その高校に入ってくる子供達は、むしろ選んで入ってきていて、進学率がものすごく高くなるとともに、その支援が必要な子供達といつも触れ合っているため、インクルーシブが当たり前のものになっている。

5 学校規模の考え方に関する意見

・小規模でも充実した学校はいくつもあり、2学級、3学級でも地域にとっては活力になるし、地域資源を大きく活用できるコミュニティスクールもあるので、地域の力を学校の中で活用するというような基本的な考え方を、いかにして工夫しながらできるかを幅広く考えていきたいと思っている。1学年4学級を一つの基準としたのは、教員数の関係も一つの要因と思われるが、岩ヶ崎高校の例のように色々な工夫の仕方があるのではないかと考えている。オンラインの連携が例に出されたが、そのほかにも、教員が兼務で動いていく、教員を特別に加配するなど、教員配置を工夫することも考えられる。

・少子化になった時にどうやってそれを絞っていくかという今、適正規模というラインを決めようとするのはとても難しいのではないかと感じている。適正規模を定めるよりも、小規模校に対してどういう手厚いことができるのか、大きい学校はどのようにやっていくかというところで、方向性をそれぞれ作っていくのも一つの考え方と思う。実際に運営していく中で、生徒数が少ない学校は、教育活動が限られてしまう部分があるので、そこに支援をしなければならないと思う。2クラスはダメだ、3、4クラス以上じゃないとダメだということは無いと思うので、その支援をどうするのか、教育財政の話もあったが、どれだけその支援をできるかということになってくる。

・専門学科も含めて、自分が行きたい学校、進みたい進路が地元にあって、そこに行くというのが一番良いと思うので、2クラスでもいいから、地元の学校を置いて欲しいというのが私個人の考えではある。

・人数が少なくなる＝希望が無くなるのではなくて、少人数なら少人数で色々な希望の持ち方と生き方があると思う。お金をどれだけつぎ込むかということも関わってきて、小規模校に対して教員を減らさず配置することが重要だと思う。

・今、登米市では小学校1年生から中学校卒業まで同じクラスで過ごす学校が少なくないため、決まった人間関係で9年間過ごした後に入る高校は、やはり複数のクラスがあって、色々な人と関わり合えるチャンスと考えている。

・保護者の目線として、令和20年度までには7,000人程度減少するということもあり、どうしても統廃合は必要になってくると思う。少数の学校に子供を入れたとしても、部活がないのではないかと考えたことを考えると、少しでも多くの生徒、仲間がいる学校に入れたいという思いはある。

・PTAとして親としての意見としては、単純な話になってしまうが、きれいな建物だったら行きたくなると思う。また、先生方も大変のため、先生方の負担にならないようにやってもらいたい。

6 遠隔教育に関する意見

- ・統合や配置を考える中で、遠隔教育は一つの大きなツールになると考えている。1人1台の端末が整備され、遠隔教育ができる状況が生まれてきているが、対面のような学びができるのか、教育効果がどうなのかは、まだまだ検討が必要。オンライン授業を聞いて生徒の力だけでそれを理解することは難しいので、その後のフォローや事前の課題を付け足さないといけないと思われる。
- ・オンライン授業は教員の負担も多く、配信校になる学校は大変であるため、県で配信センターのようなものを作り、配信専門に行く教員が居ると非常に良いと思う。配信授業に当たっては事前の勉強も必要であり、教員の研修が必要だと思う。オンライン授業については、これからより良くなっていけば小規模校に対しては効果があるものと思われる。
- ・他県の過疎地域における遠隔授業のプロジェクトに関わっているが、オンラインでできること、できないことが見えてきていると思う。教育目標に合わせて、リアルタイムのオンライン、オンデマンドのオンライン、対面での授業を使い分けて、ブレンディッドラーニングを保証するためのベストブレンドを探していくことが重要だと思う。
- ・一番重要なことは、ICTは整備して終わりではないこと。ICTが整備されて一番負担がかかるのは現場の先生であるため、ICT支援員の拡充、内容の拡張は、必須と思われる。先生方ができるだけICTを使いながら教育の質を担保していけるように、高大連携、学生のインターンシップなど、ICTに関わる第三者が介入することによって、部分的には対面を超えることや対面に近い形での代替の可能性が出てくるのではないかと思う。
- ・オンライン授業に関しては、省力化や効率化という側面が強調されがちだが、うまく社会実装するには、当然に適切な資源の投入も必要であるため、小規模校を維持するためのオンライン授業といった場合に、どの程度の資源が必要なのかという議論が部会に分かれてから必要になってくるとと思われる。
- ・遠隔教育は違うエリアで学んでいる人達のリアルな情報がオンタイムで入ってくることで視野が広がるというメリットはあると思われる。自分のエリアを背景に知識を交換し合えるということで自分が主役になるチームが出てきて、一斉指導ではできなかった、相互交流が生まれる。その反面、受講側も、発言力であるとか、あとは自分の考えをわかりやすく伝えるためにプレゼンテーション能力を身に付ける必要がある。
- ・少子化が進んでいく中で、形式的にはオンラインで、どこに住んでいても都市部に近い教育を受けられるようになるだろうと大人は考えるが、子供達自身が同じように対面の機会を確保することを希望するのか、あるいは十分にオンラインでも学べるため、活用してみたいと希望するのかは確認していく必要があると思う。

7 その他

< 1学級当たりの人数に関する意見 >

・今このICTが教育現場に入ってきており、その機器を使う人間力がなければならない。思考力、論理力、分析力、こういう力を子供達に身に付けていくためには、1クラスの人数を40人ではなく、もっときめ細やかに教育成果を上げていくための適切な人数、これを考えなければならないと思う。

< 運動に関する意見 >

・宮城県は全体的にも肥満度が非常に高く、特にお子さんの肥満度が高い。中学高校生期は体を動かさなければならず、耕さなきゃいけない時期というものがある。そう考えると、通信の話も大きな可能性のある話だと思うが、人間はバランスがすごく大事なので、体を育てることも念頭にに入れていただきたい。

< 高校教育に求められること >

・教育は何のためなのかというところに戻って考えると、人はどうしても一人では生きていられない社会的な生き物のため、高校教育では生徒が社会貢献をしていくための人格の形成、社会参加の準備ということが大切なのではないかと考えている。もちろん色々な教養を学ぶことはあると思うが、この時期のお子さんは、身体も一緒に動かしていかないと健全な精神、心は養えないので、やはり人間を育てるという観点が大前提だと思う。

・今、この少子化時代の子供達の人間力を育てる良いタイミングだと思う。大人の人口が減ってしまったら納税者が減るので、この少子化時代に教育効果をどう上げるのか、どれだけお金を投入するのか、お金なしには教育はできない。ICT関係が凄い勢いで現場に導入されているが、一度買ったら終わりではなく、教育財政、これがものすごく必要になってくる。この少子化時代に人間力を豊かに持った子供達を育てる、これこそが2021年に答申という形で文科省から打ち出された、令和の学校教育どうあるべきか、の本質なのではないか。

・労働力不足を高校で何とかしてくれ、この社会的な要請が実業高校の新しい可能性を引き出すきっかけにはならないか。一方で、進学を想定した高校での学びも尊重しつつ進化させたいと思う。そして、どちらの道を進むのか、親子で考える時を持ってもらい、実業高校で学び、高卒後、社会の即実践力として社会を支える生き方を選ぶのも一つの人生選びであり、時代の最先端を学んだり新しい文化の創造を志したりするために大学に進学することを想定して高校で学ぶことも一つの生き方選びである。色々なところで教育財政を使っていく必要があると思う。

< 再編の在り方に関する意見 >

・再編して新しい名前の学校にするだけでなく、その時に校舎を新たに建てて、新しいコンセプトとかカリキュラムにしていく。また、質の高い教員が居ることも一つの希望や魅力だと思うので、やはり時代の転換に合わせてその価値観を変えていかなくてはならないと思う。